

ほんとうにあった! ミステリースポット

③もう1つの首塚・呪われた家



残
さ
れ
た
木

195

も
う
1
つ
の
首
塚

171

残
留
思
念

145

冥
府
の
花
嫁

121



もくじ



異
界
坂

95

呪
わ
れ
た
家

67

犬
神

35

レ
イ
ラ
イ
ン

5



レイライン

さまざまな太陽の道



十二月下旬冬至、一年でいちばん日の出の時間が遅い日だ。

夜明け前の暗闇の中、ミサキはダウンジャケットとカイロで寒さを防ぎながら、夜明けを待っていた。時計を確認する。午前六時三十分。夜明けまであと十六分。終わりが近づいている。ミサキは最後に、もういちど、携帯用ボトルの蓋を開いた。柚子のおおりが懐かしい記憶を引き出した。

三年前、中学二年の十二月。ミサキの祖母は、体調を崩して床に臥せていた。どこが悪いというわけではない。心配した両親は強く入院を勧めたが、祖母はきっぱり断った。

祖母は果物が好きなので、ミサキは学校の帰り道。みかんと柿を買った。とてもいい香りだったので柚子も買った。帰宅していつものように祖母の部屋のドアを開けた。祖母の部屋は和室で庭に面している。

「おばあちゃん。ただいま」

ミサキはそのまま固まった。布団の頭の方に、祖母を見下ろすように白い人が座っていた。「あれは何？」ミサキが一步部屋に足を踏み入れると白い人は消えた。祖母

はゆっくりと目を開けた。

「おや、ミサキ。おかえり」

いつもの祖母だった。

「いいかおりがする。柚子だね」

ミサキは紙袋から果物を出した。

ミサキが、白い人について聞こうとする前に祖母は言った。

「安心していいよ。あれは、よく知っている方。そういえば、ミサキも一度、助けていただいたね」

不思議そうな顔をしたミサキに祖母は続けた。

「去年の春。桜の森で、ミサキが化け桜に食べられそうになったとき」

「あのときの不思議な人？」

祖母はゆっくりうなずいた。

「おばあちゃんのお見舞いにいらしたの？」

「お見舞い。いいや。知らせに来たのよ」